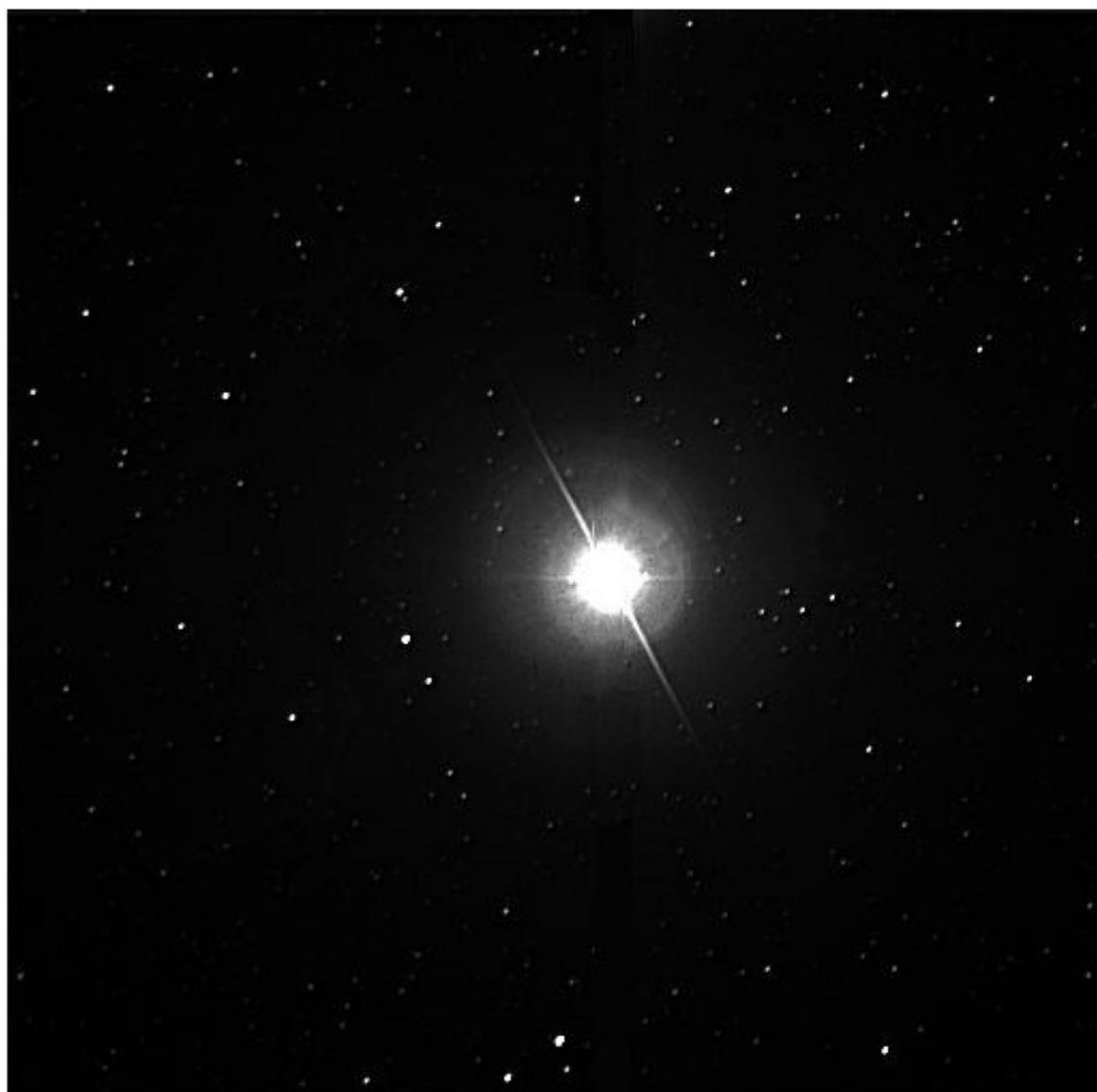


【2014-07-28】 ブルー・ア
ルタイトルを一杯



b-svaha

この祈りの体験の後、ビジターであるわたしたち三人は、シグニーによって、それぞれに与えられた部屋に案内され、デネビーは主管室に戻った。ポニー・Cは、宇宙船で行われる会議のため、中央司令室へと向かった。

わたしたちはここで、しばしの休息の時を与えられた。

宇宙船での二日目が終わったようだ。

いつの間にか、蔦柄の枠でできた窓から夕日が差し込み、部屋の白い壁を鮮やかなマゼンタで染めていた。

(実は、僕は宇宙船になど乗らなかった…。ここは、高原にあるしゃれたホテルの一室にすぎない。

僕はただ、保養目的で、一週間ほどの旅に出たのだった。きっと、そうだったはずだ…)

目を閉じてベッドに横になったまま、そうしてみた。それくらい、この部屋の、どこかアンティークでシンプルなデザインや色調も、窓から見える森や夕日も、自然で美しく新鮮だった。

私は、今日一日に起きたことを、一つずつ思い返していった。

朝の食堂の様子、医療班に足を踏み入れた時の驚き、噴水のある庭園の美しさ、みんなで辿った白い道、コテージの二人の優しさに満ちた笑顔、キャンプ場のほのぼのとした風景、白鳥座を象ったこのサナトリウムの長い廊下と不思議な部屋の数々…。

とても、一日で起きたことのように思えなかった。何日もかけて観てきたように思えて仕方がなかった。

(一体、本当は、どれくらいの時が流れたのだろうか？)

もしかしたら、数か月、いや、ひょっとしたら、一年くらいは経ってしまったのではないだろうか？)

そんな風に思えるほど、地球ではあんなに確かだった時間の概念が、あやふやで頼りないものになっていた。

地球にいた時の自分の生活が、何か遠い、他の人の人生でも見るように、色褪せたものに思えた。

実際、日本のどこでも、電車に乗れば、到着には二分と遅れない。どこにいても、何らかのメディアが、正確な時報を告げてくる。約束の時間に遅れそうになれば、人は冷や汗をかき、階段も駆け登るし、車なら黄色でも止まらないだろう。

そんな、地球では当たり前の習慣が、奇妙なものに思えた。

ちょっと馬鹿らしくもあり、懐かしくさえ思えてきた。

どちらの自分が本当の自分なのか、自信をもって決められない気がしてきた。

私の回想は、いつしか祈りのシーンへと移っていた。

デネビーの導きでみんなが祈りの輪を作ると、講堂にいたはずの私たちは、アルタイル、ベガ、デネブの造る大三角を仰ぐ銀河の中にいた。

そこでは、星々と星座と自分が、同じものでできていると思えた。

自分は人ではなかったのだと、思い出したような気がした。

本当の私とは、星だったのだろうか...

やがて私は、深いまどろみの中に、星たちとともに落ちていった。

クリスタルのビーチ

次の朝目覚めると、ゴシック風の部屋の窓からゴールドの光が優しく差し込んでいた。この部屋は横棟の端にあるため、夕陽も朝日も豊かに注ぎ込むのだった。医療班の太陽も、地球と同じ方角から昇り、同じ方角に沈んでいた。

陽光に元気を貰ったわたしは、身支度を整えると、通路を隔てて用意されたみどりとりラのドアを叩いた。

二人はすでに用意ができていたため、わたしたち三人は、建物の中央部、十字架の中心に当たる部分にある食堂へと向った。

部屋は、何とも表現し難い温かみをもった淡いピンクゴールドの壁が、優雅なハート型の曲線を描いていた。

この部屋に入るだけで、自然と、細胞が活性化し、腹の底から元気と愉快さが湧いてきた。

私たちはそれぞれ好きな朝食を注文すると、今日の活動内容について話し合った。

みどりとりラは、北西の棟の記念・研究施設を見学し、この宇宙での医療の発達を学びたいということだった。

私は、気になっていた海や白砂のビーチを見るなら今日の天気が最適だと感じていたので、できればそうしたいと話した。

私たちが食事をし終わり、そろそろと、思っている頃、シグニーがテーブルに座る私たちを見つけてやってきた。私たちの願いは快く受け入れられ、シグニーが私を、別のスタッフが彼女たちを案内することになった。

ハート型の食堂を出たシグニーと私は、サナトリウムの丘を西へと下る、白い道を歩き始めた。

サナトリウムは、海拔三百メートルくらいの場所にあるため、十キロほど先に白い砂浜や蒼い海が鮮やかに見下ろせる。

道の両側には、天然の樹林を緑の草原が絨毯のように覆う中、朱色や真珠、すみれ色をした花々が美しく調和して咲いている。

医療班の入り口からサナトリウムまで十五キロほどを歩いたときもそうだったが、ここでの道を歩く感覚は、地球でのそれとまったく異なる。一步一步の感覚は確かにあるのだが、目的地に到達する感覚がずい分と早いのだ。周りの景色を眺め、みどりやりラ、ポニー・Cと会話を楽しんでいるうちに、コテージにもサナトリウムにもあつという間に到着していた。

(この分なら、白く光る入り江のビーチへも、らくらく辿り着けるだろう...)

そんな風に思っていると、

「ここでは時間軸の概念が地球よりずい分と柔軟ですから、実質的時間も自由に変えられるのです。地球もやがてそうなるでしょう...」

と、並んで歩いているシグニーが微笑んだ。

私たちは、アキーラとライラの住むコテージのフィールドを左手に見送ると、目的地へと意識の焦点を合わせた。

道の勾配がにわかには強まり下り坂となった。

時折、空気の中に潮の香りが混じっているのがわかる。

まもなく、道の両側を遮る緑の隙を縫うようにして、少しの間姿を消していた海の青と砂浜の白が、視界の下の方から、ぐっと近づいた姿を見せ始めた。

(懐かしい、地球の海の匂いだ...)

私は小走りに林道の坂を駆け下りると、乾いた白砂の心地よい熱さを足の裏に感じながら、シュワシュワと音を立てて寄せる波に足を浸した。

(心地よい！ただ、純粹に心地よい...)

私は、太陽と水と潮の香りの織りなす美を全身に感じて、嬉しさのあまり思わず歓声を上げてしまった。

心と体のすべてが、いま開放されている...。

私は太陽を見上げ目を閉じると、その感覚を全身で味わった。

目を開けると、いつの間にかそばに来ていたシグニーが、下を向くように私を促した。

白や透き通った丸い小石が、透明な水底で、きらきりとまろみを帯びて輝いている。

クリスタルだ！

「そうです。ここは、水晶の砂浜なのです。

この白浜の砂は、すべてクリスタル・クォーツでできているのです。あなたの頭頂にある、クラウンチャクラに連動するものです」

シグニーが教えてくれた。

私が走り抜けた砂浜は、乾いたクリスタルが白く見えていたのだろう。よく見ると、一つ一つが様々な大きさのクリスタルだった。

そういえば、確かに、頭の上の方がうずうずして、そこからエネルギーが入ってくるようだ。それが全身を活性化させている感じがした。

海は、どこまでも蒼く澄んだ海面を太陽の光彩で飾りながら、水平線のかなたで空と交わっている。

「ここはまるで、天国ですね。

ここに來られて、本当によかった...。

ありがとう、シグニー」

私は心から彼に礼を言った。

「それは本当によかった。

あなたはこれから、好きな時にいつでもここを訪れることができます。

さあ、少し歩いてみましょう」

そう言うと、彼は、波の泡が心地よく足首をくすぐる水際を、北に向って歩き始めた。

しばらくいくと、白く光っていた砂浜が、いつの間にか、ちらちらと黒い光を反射するようになった。白い泡の合間に揺れている水底のクリスタルも黒いきらきらした石に変わり始めた。

「黒耀石です。あなたのベースチャクラが反応しているのがおわかりですか？」

シグニーが、小首をかしげ、楽しそうに問いかけたのとほぼ同時に、足元からエネルギーが突き上げるようにして昇ってくるのを感じていた。

ベースチャクラとは、股間の辺りに位置するものだと記憶しているが、エネルギーの渦がそこに湧き起こっているような感じがして暖かく感じた。

「生命力が枯渇していると感じたなら、このビーチに來てゆっくりされるといいでしょう。一人で、お仲間と來られてもよいですね。歸る頃には、すっかりチャージされていることでしょうから...」

シグニーはそう言うと、波打ち際を少し離れた乾いた黒耀石の辺りまで歩いていき、椰子科に似た樹の木陰にゆったりと腰を下ろした。キトンの白い衣に身を包んで、ゆっくりとこちらに手を振る彼は、さながら天に棲む白鳥のように見えた。

私は、水の中で光る石たちをひとすくい手にとってみた。

つややかな黒の中にグレーの斑点が優しげに浮かんでいる。

心がどんどん安定していく感じが拡がる。

私はシグニーのところに行くと、手の平の石を見せながら彼の横に座った。

「石は面白いですね...。

ここには、宇宙の様々な星からのクリスタルが採取され持ち込まれています。

彼らは、いろいろなことを、私たちに教えられます。

この先にも、五つのクリスタルビーチがありますが、私はもう戻らなければなりません。あなたはこのあとどうしますか？お一人で先に進まれるもよし、わたしと歸るのもよろしいでしょう

」

そう言うと、彼は私を見て微笑んで続けた。

「大丈夫。お一人でも、道に迷うことは決してありませんから」

この黒耀石のビーチが大いに気に入った私は、まだまだこの場所に留まりたかったし、それ以上にこの先の砂浜もみたいと思ったので、素直にそう伝えた。

「では後ほど、サナトリウムでお会いしましょう。もし私が必要になったら、心の中で呼んで下さい」

シグニーは、そう言うと立ち上がり、軽く会釈して元の道を辿り始めた。

その姿は、見る見る遠ざかり、あっという間に私の視界から消えていた。

私は砂の上に仰向けになって目を閉じた。黒耀石の落ち着いた波動が全身を包み、閉じた瞳の裏にきらきらと輝いて見える。

静かに凧いだ潮騒が優しい子守唄のように響き、木陰の葉がそよ風にカサカサ揺れ、陽光と影を交互に私の顔の上に落としている。

いつの間にか、私は眠りに落ちてしまったようだ。足元の波が指先を浸すのを感じて目を覚ました。

ゆっくりと身を起こすと、私は黒い石たちにお別れを言い、次の砂浜に向かって歩き始めた。

パナクルという果実

日の傾き方から見て、午後三時くらいになったのだろうか。

クリスタルの浜から黒耀石の浜は入り江の形をしていたが、しばらく歩くうちに、海岸線は大きく右へ旋回し、クリスタルの浜は見えなくなっていた。

浜の色が、徐々に黒から赤みを帯びた色に変わり始めた。

黒耀石の間にポツポツと見えている赤い石を一つ拾い上げ、右の手の平に置いてみた。

ルビーに朱色を加えたような上品な石だ。ところどころ、薄い褐色も帯びている。

(何の石だろう...)

おへその辺りがジンジンと反応している...)

私はシグニーの言葉を思い出し、立ったまま心の中で彼に尋ねてみた。

(シグニー。この赤い石は、何という石なの？どのチャクラに対応しているの？)

彼の笑顔を思い浮かべながら、しばらくじっとしていると、

(カーネリアン...、2...)

と、聞こえた気がした。

「そうか！きみ、カーネリアンと言うんだね。僕は、アル。よろしくね」

シグニーと初めてテレパシーで会話できた嬉しさに、赤い石に向かってそう話しかけていた。感じていた第二チャクラの反応も正しかったようだ。

しばらくいくと、砂浜は左へ緩くカーブし、また大きく右へと曲がり始めた。この辺りまで来ると、浜はもう完全にカーネリアンの赤一色だった。黒耀の浜の先端がもうすぐ視界から消えそうだった。

この石の波動を浴びていると、クリエイティブな意欲がかき立てられ、どんどん前に進みたくなる。私は、サンバのステップを真似したり、好きな歌を口ずさみながら次のビーチへと歩みを進めた。

砂浜は、右へと大きくカーブしたので黒耀の岬はもう見えていない。海岸線は、この先緩く左にカーブし、これまでのような弓形の入り江を描いている。

浜の赤い色は少しずつ薄れ、黄色味を帯び出したようだ。足元に見えるいくつかを拾い上げてみると、黄色、赤味がかった金色、琥珀色をしたものもあった。

(確か、これは...)

そう、シトリン...)

シグニーに尋ねると、すぐに答えが返ってきた。お腹の中心辺りが反応しているから、多分第三チャクラに対応するものだろう。心は先ほどのビーチと比べ、かなり落ち着いてバランスが取れた心地がしている。

シトリンの浜が岬のように突き出している辺りまで来ると、陽射しも大分傾き、水平線の少し上で空をマゼンタや茜に染め始めている。

ここまで歩いてくると、さすがに少し疲れを感じ、空腹も覚えていた。

私は一番近くに見える木陰を見つけると、その木の下に腰を下ろした。ふと、上を見ると、バ

ナナの樹の葉のような大きな葉の下に、見たことのない実が束になっていくつも生っていた。それは、こぶしくらいの大きさで、米国のハーシーズチョコのような三角錐の果実だった。

一つもいで手に取ってみた。

表面の黄色の薄い皮は、バナナのように上から剥くことができた。中には、あけびのような実が七つ八つ輪になって並んでいる。実は白く、赤い粒粒を含んでいた。

私は、一つをとり、思い切って口に入れた。

白い部分は、熟れたバナナのように柔らかく、甘く、ミルクの風味がある。赤い粒粒は、プチプチとした歯応えも、酸味と甘さも、まるで苺のようだ。

「美味しい！」

感動して思わずそう叫んでしまった。残りの粒もゆっくりと味わって食べ、そのほかに二つの実を食べると満ち足りた。

何というタイミングのよさだろう...

私はここの自然に感謝し、この世界を支配する神を想定して感謝し、シグニーにも感謝した。

シグニーによれば、これはパナクルという果実だそうだ。

太陽はいま、水平線に半分隠れ、海の面は、マゼンタや茜色、空の蒼やオレンジ、ゴールドの光のかけらで満ち溢れている。茜空の上の方では、桔梗色を垂れ幕にした星たちが、撒き散らした宝石のように輝き始めた。

(決めた！今夜はここで野宿しよう...)

幸い、大気は温かく少しも寒くならなかったし、この場所には、そんなに危険なことはないはずだ。

シグニーを心の中で呼んで、その旨を伝えると、微笑んでこちらに手を振る彼のイメージが浮かんだ。

私は安心して、シトリンの浜辺で一夜を過ごすことにした。

パナクルの大きな葉っぱを一つもらい体にかけて横になると、肩から脚のつま先までが覆われた。

あとは、美しい星空と移りゆく海の輝きを見つめながら、揺りかごの歌のような波の音を聞いていればよかった。

シトリンの安らかな波動は、やがて私を深い眠りへと導いていった。

【2015-02-23】 ブルー・アルタイルを一杯

<http://p.booklog.jp/book/88415>

著者 : b-svaha

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/b-svaha/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88415>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88415>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ